世界の人びとのためのＪＩＣＡ基金活用事業・業務完了報告書

１．　業務の概要：	
（１）事業名	インドネシア：西ヌサトゥンガラ州中央ロンボク郡・ジョンガット地区教員に対する健康教育支援事業
（２）実施団体名	特定非営利活動法人 POMk Project
（３）実施期間	2019 年 8 月 23 日～2020 年 5 月 31 日
（４）実施国	インドネシア共和国
（５）活動地域	西ヌサトゥンガラ州中央ロンボク郡・ジョンガット地区

（６）活動概要

①活動の背景：

ロンボク島中部から東部はインドネシア国内で比較しても、一人当たりの所得が低いだけでなく、高い乳幼児死亡率など、健康的な生活を送れているとは言い難い地域である。さらに 2018 年にマグニチュード７以上の地震を 3 回経験し、テントでの避難生活を余儀なくされている被災者が多い。すなわち、住民の健康に関する支援を最も優先して実施するべき地域といえる。

病気の予防や治療を受ける判断には、最低限の健康に関する知識が必要とされる。通常、これは学校教育において習得していくものだが、インドネシアでは地方によって教員のレベルが様々だと言われており、講義が必ずしも行動に結びついていない。現地初等中等教育の教員の、健康教育スキルの向上が必要な状況である。

②活動の目標：

今回の目標は「ロンボク島で初等中等教育に従事する教員が生徒に対して健康に関する知識を効果的に伝えられるようになる」こととしている。現在、現地の教員の健康教育に関する知識は十分とは言えず、知識があってもどのように伝えたら効果的なのか、ノウハウに乏しい状況である。ここに私たちが持つ健康教育の体験型学習会のノウハウ（身近なもので作れる模型作成、福笑い、カードゲームなどを生徒にとって年齢の近い大学生が教える）を、現地化した上で移植することで、今後入学してくる生徒たちは確実に健康に関する知識を習得することができる。さらにはターゲットサイトである学校を地域の学習ハブとして機能させ、将来的にはこの現地の現状に即した「教員の健康教育スキル向上法」を当該地域や近隣地域に広め、地域の全般的な健康状態を改善する、という上位目標を掲げている。

２．　業務実施結果：

（１）実施した内容

本事業にかかわる現地渡航は契約以前のものも含めて 3 回（2019 年 8 月、2019 年 12 月-2020 年 1 月、2020 年 2-3 月）実施した。渡航期間は渡航者によって異なるが、いずれも１-２週間であった。また渡航人数は毎回４-５人であった（そのうち JICA 基金による旅費支弁の対象となったのは１-２人）。なお、現地での延べ活動日数は１０６人日であった。

大きく分けて 8 月の渡航では「日本側が実演して問題を洗い出し、コンテンツ現地化のための要件設定」、12 月の渡航では「コンテンツ作成の進捗確認と現地教員とのディスカッション」、2 月の渡航では「JICA スタッフ視察への協力」「現地教員のパフォーマンスチェックと今後の体制づくり」を実施した。以下にそれぞれの活動項目に関して記載する。なお、本事業では現地インドネシア国立マタラム大学の協力を得て行っており、今後の活動展開の先駆者となれるよう日本側が渡航していない際には現地にて同大学の教員・学生が多くの作業を担い、事業への理解を深めた。

【実施内容①：現地の現状把握とニーズ調査】
事業前の視察やヒアリングである程度把握できていたが、それぞれの渡航の際に現地の教員から意見を聴取した。２月渡航時には、生徒の両親などからも意見を募った。

【実施内容②：教材の現地化】
８月渡航時に議論した結果、「臓器パズル」向け補助テキストのインドネシア標準語版と、現地方言であるササク語（中央ロンボク方言）を作成した。また、日本で使っている模型材料を持っていき、同等の機能を持つものがどこで入手可能か調査をした。

【実施内容③：日本人講師の海外向け研修】
渡航前に日本人向けにインドネシアに関する研修を行い、コミュニケーションがとりやすくなるよう配慮した。

【実施内容④：日本人による実演】
渡航時に、日本人学生と現地大学生が協働して現地の小中学生向けに授業を行った。この様子を現地学校教員はモデルとして学習することになる。

【実施内容⑤：現地教員のスキルチェック】
それぞれの渡航時に現地教員の授業の様子を視察し、内容に誤りがないか、などのチェックを行った。

【実施内容⑥：現地人材の日本での研修】
これは本来、現地教員の中でモチベーションの高い者を招聘することとして、１２月に予定

していたが、日本側が現地に渡航し、現地にて行った。

【実施内容⑦：効果測定とフィードバック】
渡航時とそれに引き続いてアンケート調査と感想の集計を行った。また、JICA スタッフ見学時には現地 YGMC 校教員と保護者からとの意見交換も行った。

（２）実施成果：

まず、それぞれの渡航に関わる成果を記載する。

a) 2019 年 12 月-2020 年 1 月の渡航

契約前の 8 月渡航時に今回の活動での注意点として、1) 授業をするのに適切な人数にすること、2) 資材等を多めに準備すること、3) 現在準備されている英語版テキストをもとにインドネシア語（標準語）版テキストを作成すること、4) さらに現地方言（ササク語のうち中央ロンボク方言）版を作成すること、が日本側と現地側で共有されていた。12 月渡航では、現地カウンターパート主導での活動がどのように進行しているのかをチェックし、次年度以降の活動へつなげるのを主目的とした。まず、臓器パズル用テキストのインドネシア語版が完成したものを確認した。また、現地主導で（前回訪問時に行った）「臓器モデルを用いたパズル：福笑い」が実施されていることを確認した。こうした活動は現地団体が開設した Youtube チャンネルや当団体ホームページでも確認することができる。また次年度以降、現在の学校から他の学校へも事業を拡大する予定である。下調べと教員との関係構築のために候補校（Yayasan Penpon Pesantren al-Halimy および Yayasan Darul Muhajirin の２校）を視察した。この２校の教員と意見交換会を行い、YDM 校の規模や教育内容に対する知見をえた。また次年度の POMk 事業への同校の参画が表明された。

また、ターゲットグループが所属する学校にて、（８月の渡航時に要望のあった）「スポンジを用いた肺の老化と喫煙の影響」について学習会を開催した。参加教員数は 7 人、生徒数は 50 人程度であった。また、当校は高校生から小学生までが寄宿舎にて生活を共にしているのが特徴である。そこで、「高校生による小学生むけ紙芝居制作」による教育が実施可能かどうか、教員たちとディスカッションを行った。当地では紙芝居そのものを知らないため、まず動画を見せてイメージを持ってもらい、パイロットグループとして数人のグループに作成してもらうよう依頼した。

b) 2020 年 2 月-3 月の渡航

2 月 25 日から 3 月 9 日にかけて現地に渡航した。今回は、（１）ターゲットサイトの視察と意見交換（JICA 調査団同行)、（２）現地カウンターパート主導での活動がどのように進行しているのかの継続チェック、（３）新規「灯油ポンプを使った循環器系の理解」コンテンツの実施、が主な目的である。徐々にインドネシア側の関与の比率を高め、自信をもって活動できるように配慮している。

（１）JICA 調査団とともに 2 月 28 日にターゲットサイトを訪問した。ターゲットグループである小学校教員と現地大学生（7 人）による、小学中学年（32 人）向けの「臓器パズル」授業を紹介することができた。授業の後に同小学校教員だけでなく保護者（6 人）を交えて意見交換会を行った。保護者側から今回の活動に対し、「今回のこういった活動は大変有意義だと考えている。今後、どういう食生活を送るべきか、といった食育に関するコンテンツを望む」「この学校では、子供がどういう教育を受けているのか報告が多く安心できる」「先生や親も指導するだけではなく、率先して行動することが重要だと学んだ」といった意見の表明があった。特に最後の意見は、家庭への知識の浸透も意図して活動している我々にとって良いシグナルであった。

（２）「臓器ジグゾーパズル」に使用するテキストのササク語中央ロンボク方言版が完成した。

（３）3 月 7 日にターゲットグループが所属する学校にて「灯油ポンプを使った循環器系の理解」について小学校中学年を対象にした学習会を開催した。参加教員数は 13 人、参加大学生数は 10 人、生徒数は 32 人であった。灯油ポンプと大型タッパー、色のついた水を利用して、心臓から肺、全身への血液循環について理解を深めてもらう授業を開催した。水に色がついており、現地教員からは、「楽しく学習できた」という意見が多い一方で、「内容が少し難しいのではないか」という意見も見られたため、対象学年や内容を検討することとした。

次年度以降の事業拡大のために、西ロンボク郡に所在する YA 校（Yayasan Asshohwah al-islamiyah）を新たに視察した。なお、YA 校からも、本活動への参画が表明された。

3 月 1 日にバリ州のウダヤナ大学の Wirawan 教授と会談した。次年度以降においてバリ島を活動地域として拡大した場合に、マタラム大学と同様に協力関係を構築することで合意した。また、バリ島における活動候補校の選定を依頼した。 3 月 6 日には、中央ロンボク郡の私立大学である、カマルル・フダ大学を訪問し、講演と打ち合わせを行った。同校からは今回の活動への参加が表明され、ロンボク島内で複数の高等教育機関が参加することになった。ま

た、 3月4,5日にはYA校とYDM校で臓器パズルの授業を行った。ここには本来のターゲットサイトであるGMC校の教員にとっても他の学校を経験するよい研修になったようだ。

なお、今回の活動の詳細はホームページ上で公開する予定である。
Youtube(POMk Indonesia)： https://www.youtube.com/channel/UCICMMjCJuenx_eu8Xj3HM3w
当団体ホームページ： https://pomk.org

項目ごとの主な進捗は下記のようになる。
【実施内容①：現地の現状把握とニーズ調査】
・ 学校運営や教員、生徒の気質の理解（８月）
・ 現地で求められるコンテンツの把握（８月）

【実施内容②：教材の現地化】
・ コンテンツの現地化に当たっての問題点の洗い出し（８月）
・ インドネシア語（標準語）版臓器パズル用テキストの作成（～12月）
・ ササク語（ローカル言語）版臓器パズル用テキストの作成（～3月）
・ 肺循環モデルの現地材料を用いての作成（3月）

【実施内容③：日本人講師の海外向け研修】
・ 渡航前のインドネシアに関する基礎知識の習得（8月、2月）

【実施内容④：日本人による実演】
・ 「臓器モデルを用いたパズル：福笑い」（8月）
・ 「スポンジを用いた肺の老化と喫煙の影響」の勉強会（12月）
・ 「灯油ポンプを使った循環器系の理解」（3月）

【実施内容⑤：現地教員のスキルチェック】
・ 一般的な授業の視察と「臓器モデルを用いたパズル：福笑い」の振り返り（8月）
・ 現地校教員による継続的な「臓器モデルを用いたパズル：福笑い」の実施（～12月）
・ 「臓器モデルを用いたパズル：福笑い」のJICAスタッフを交えての実演（2月）

【実施内容⑥：現地人材の日本での研修】
・ 現地での「スポンジを用いた肺の老化と喫煙の影響」の勉強会（12月）

【実施内容⑦：効果測定とフィードバック】
・ 「臓器モデルを用いたパズル：福笑い」アンケート（8月）
・ 「スポンジを用いた肺の老化と喫煙の影響」の勉強会アンケート（12月）
・ 「臓器モデルを用いたパズル：福笑い」実施後の教員・保護者インタビュー（2月）

（３）得られた教訓など：

従前から付き合いがあるのである程度予見できていたとはいえ、やはりある程度の大人数が集まると、「人が集まるとついついお祭りにしがちなインドネシア人気質」が出てきてしまうので、学習効果という意味では適切な人数の設定が重要だと感じた。8 月渡航時の経験を踏まえ、一度の学習会の参加人数を 30-40 人程度に設定したところ、比較的高い学習効果が引き出せたと感じる。というのも、現地教員は気が散りがちな子供たちの注意を引き付けるノウハウ（お互いの鼻をつまんで息を止めさせる、その場で足踏みダッシュをさせるなど）を持っているので、マイクを使わずに声の届く範囲であれば、彼女らのポテンシャルが一番引き出せるからである。こうしたノウハウは日本でも役に立ち、さらにこれに医学的な意味づけを付け加えれば、教育コンテンツにもなる。ぜひ、今後日本での活動にも役立てていきたいと考えている。

新しい場所でこうした活動を展開する上で重要なのは、それぞれの施設・役回りでいかに速く「エース人材」を発掘するか、だと考えている。意欲と能力のある「エース」を突破口にして、そこから水平展開するのが一番効率がよいと改めて感じた。今回は比較的速くエース教員を発掘することができたので、ここをモデルクラスとして活動のすそ野を広げられるか、来期以降検証していきたい。ただ、その際にはエース以外の人材にとっても誇りをもって活動に取り組んでもらいたいと考えている。エース人材は大体において「多能工」気質があるのだが、その他の人材は必ずしもそうではないため、『あなたはこれこれをやることに集中してください』と得意な事をやってもらって、それに対して正当な評価をしていく、ということが活動へのロイヤリティを高める上で極めて重要だと感じた。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

得られたフィードバックをもとに、教材や勉強会の内容の改善に努める。また、年に 1 回以上現地を訪問して、現地教員主導で開催する勉強会を視察する。同時に現地での実施状況をメールや Skype 等でモニタリングする。こうした取り組みを日本国内で活動する際に日本の小中高生に紹介することとしているが、その際に現地とインターネットで結んで交流を深め、日本の子供たちにとっても小さいころから国際感覚を育てる場としたいと考えている。

また、すでに今回のターゲットサイトである YGMC 校をモデル校として、ロンボク島内を中心にこの活動を広める予定である。今回のターゲットサイトの教員たちには、先行者として他の学校にやり方を教える活動を通じて、自ら発案した新たな取り組みが出てくることを期待している。その際にいつでも監修できるような体制を、現地の大学数校と協力して構築していく。

３．その他（エピソード・感想・写真など）

（１）活動中のエピソード・感想など

現地の小中学校の教員は日本と比べるとやはり年齢が若い方が多く、日本の大学生や現地大学生とのコミュニケーションが比較的円滑に進みやすい、と感じた。彼ら自身も子供たちに教える体験を重ねることで、自らも学習になっている実感があるようだ。

一方で現地の校長レベルになると、特に「JICA 事業ということで意識してしまい JICA になんでも期待しすぎる」「大風呂敷広げる」というパターンに陥りがちである。その都度『できることだけを計画し、それを確実に実行していくことが信頼につながる』と繰り返し何度も念押しをしていく、というのがこれまでも、これからも必要なのだ、と改めて感じた。

（２）活動の写真

＜12-1 月の渡航分＞

今回 YGMC 校では肺や喫煙について話しました（左）。中央が YGMC 校の先生で、両側にマタラム大学教員と大学生です。Youtube チャンネルも活用しながら今後の計画を相談しています（右）。

また、YGMC 校から「ほど近く、より大規模で郊外型」の Yayasan Darul Muhajirin（YDM 校）と、「距離があり、より小規模で都市近郊型」の Yayasan Penpon Pesantren al-Halimy（YPPH 校）を拡大モデルとして次のターゲットとしました。

マタラム大学のスナルピ教授も交えて、YDM 校の先生に私たちの活動を話し、スペースを確認しました。

次に YPPH 校で先生たちと相談。うしろの表は全校生徒の名簿。全部で 65 人と少なめ。

＜2-3 月の渡航＞

今回もインドネシア側が主体となって POMk 活動を実施できているかどうかのチェックはもちろん、これまでとは違うコンテンツも行いました。また、今後の活動を視野に入れて新しい地域を視察するなどの取り組みも行っています。まず、JICA 調査団がロンボク島現地を訪問し、取り組みを見ていただいたのでそのご紹介をします。

いつもの YGMC 校で POMk 活動の実演です。まず臓器パズルの復習。前回と違ってそれぞれの臓器にいくつかのサイズを用意します。

臓器の裏側に両面テープを貼ると、まるで透けて見えるみたい！体の大きさに見合ったサイズをつけることにしました（左）。その後、YGMC 校の先生や保護者を交えて意見交換をしました（右）。

「ここの先生は保護者も学校行事に参加するよう取り計らってくれたり、学校でのとりくみの様子を細かく伝えてくれたり、いろいろ感謝しています」という保護者からの意見もありました。教育上、不安なことがあっても先生に相談することができているようです。

別の日には血液循環の勉強をしました。

まずは装置の組み立て。肺と全身に見立てた容器を用意します。灯油ポンプは心臓の代わり。どっちが右心でどっちが左心でしょう（左）？食紅で色のつけた水は血液をイメージしています。ポンプを握って、血液を運搬します（右）。

心臓役は疲れる！！でもその疲れるくらいの運動量をいつも心臓は働いているのです。実はこの色水の量は、1 分間に心臓が送り出す血液の量とおなじくらい。だから 1 分以内に水を運べなかったら、自分の心臓に負けてる、っていうことになります。

生徒たちと集合写真を撮影した後（左）、先生たちと反省会をしました（右）。

今回の渡航では新しいタイプの授業も成功し、いろいろな大学や寄宿学校との協力体制を構築できたという意味では、収穫の多い渡航だったと思います。次年度以降に間違いなく生きてくると思いますので、今後が楽しみです。と同時に、それを支える体制づくりがますます必要になりそうです。

（３）JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

専門家のターゲットサイトへの視察や、今後の活動に役立つ情報提供などのきめ細かい活動は、やはり他のファンドと異なる素晴らしい点だと思いました。今回の活動を開始するのに先立って、JICA が主催する講習会や研修会へ参加する機会を得ました。実際に活動されている団体の方から直接ノウハウを聞くことができただけでなく、プロジェクトの実施監理、予算管理の方法、案件形成のポイント、安全対策といった点を体系的に学ぶことができ、団体としても個々人としても、プロジェクト遂行能力が高まったと実感しています。

特に今回は現地活動中に、JICA スタッフの方や専門家の方々にターゲットサイトへお越しいただいて助言を受けることができ、さらにはロンボク島在住の日本人の方をご紹介いただいて連絡先を交換することもできました。こうした有形無形の支援は JICA でないとできないことではないか、と感じました。また、JICA からのご支援を頂けたことで団体そのものの信用度が増して話が通じやすくなり、他からの助成金などを得やすくなった、という実感もあります。認定 NPO 法人となる前に通常枠にて受託できたことは、他の組織から見たときにも 2 年以上の活動実績がある、とお墨付きを得たのに等しい効果がありました。今後とも、JICA の国内拠点や海外拠点とできるだけ連携して活動を進めてまいりたいと思います。